

<今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 4章6～10節 >

### 1 血のつながりを超えた「兄弟たち」(6)の登場。

この手紙ではここだけに出て来る「兄弟たち」(6)です。しかし、大事なことを示す一語です。初代教会は血のつながりを超えた家族を考えたのです。いまだに民族の違いが争いに油を注ぎます。しかし、血でつながった家族でも争いは起こります。ここを読む者は、それらのことが起こらない「神の家族を生み出す教え」をここから聞き取ろうとしながら読まなければならないのだと思います。

### 2 目指すは「キリスト・イエスの立派な奉仕者」(6)。

パウロは、そうして聞き取って何を目指すのだと考えているでしょうか。宗教改革者カルヴァンは、それが「キリスト・イエスの立派な奉仕者」(6)である点について力を込めて語っています。「信仰の言葉とあなたが守って来た善い教えの言葉とに養われて」(6) — つまり、私たちが信仰を持って目指すのが、「キリスト・イエスの立派な奉仕者」であることに込められた恵みの大事さを強調しているのです。私の罪のために死んで下さったキリストに仕える者(奉仕者)となれる恵み、それが分かった時に、私たちはキリストの神以外の何者にも支配されないし、同時に何者の奴隷(奉仕者)にもなれるようになったのです(宗教改革者ルターの『キリスト者の自由』の冒頭の言葉)。

### 3 「信心の鍛錬」が「体の鍛錬」より大事な理由。

「体の鍛錬」(8)とはジムに行つて体を鍛えることではありません。自分で律して何かを守り抜いて救いに達しようとするような取り組みのことです(4:3に注目)。「信心」(7,8)とは「敬虔」と訳してもよく、ひたすら神様を信頼し、神様に向いて(聞いて)生きる姿を指しており、そういえば、この個所で語られる全ての教えがそのようなものです。

### 4 「私の努力」より「救い主である生ける神への信仰」が大事。

「すべての人、特に信じる人々の救い主である生ける神に希望を置いている」(10)で、「すべての人」と「特に信じる人」の違いを考えるかもしれません。神様は全ての人を救いに招いておられるのであり、救いは全ての人に向けられているのです。よって、その「神に希望を置いて」生きる者となることが大事であり、私たちにそれを押し付けずそう選択することを待っておられる神様なのです。よって「信心」が大事なのです。